新村出著

广辞苑

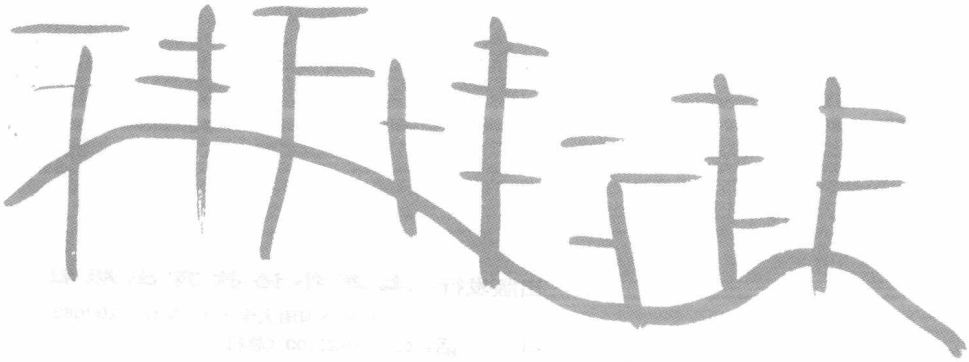
第六版

岩波書店

上海外語教育出版社

广辞苑

新村出 编



上海外语教育出版社
SHANGHAI FOREIGN LANGUAGE EDUCATION PRESS

图书在版编目（CIP）数据

广辞苑（第五版）／（日）新村 出编.
—上海：上海外语教育出版社，2005
影印本
ISBN 7-81095-442-3

I. 广… II. 新… III. 日语—词典
IV. H366

中国版本图书馆CIP数据核字（2004）第101463号

图字：09-2003-448号

出版发行：上海外语教育出版社
（上海外国语大学内） 邮编：200083
电　　话：021-65425300（总机）
电子邮箱：bookinfo@sflep.com.cn
网　　址：http://www.sflep.com.cn http://www.sflep.com
责任编辑：赵丽君

印　　刷：南京爱德印刷有限公司
经　　销：新华书店上海发行所
开　　本：890×1240 1/32 印张 94.25 字数 15050 千字
版　　次：2005 年 4 月第 1 版 2005 年 4 月第 1 次印刷
印　　数：3 100 册

书　　号：ISBN 7-81095-442-3 / H・142
定　　价：139.00 元

本版图书如有印装质量问题，可向本社调换

出版说明

日本是我国一衣带水的邻邦，两国人民有着两千多年友好交往的历史。特别是我国实行改革开放以来，中日两国在经济、贸易、科技、文化、教育等方面的交流和人员往来日趋频繁。在我国，始于八十年代的日语学习热潮，一直长盛不衰，且有不断升温的趋势，日语已成为继英语后的第二大外语。

众所周知，学习外语离不开工具书，一部好的工具书可以帮助学习者获得事半功倍的效果。为了满足新世纪日语学习更高层次、更高目标的需要，本社引进出版了日本的品牌辞典『广辞苑』（第五版）。

『广辞苑』是日本国语辞典中的精品。一九五五年，第一版『广辞苑』（在其前身『辞苑』（一九三五年出版）的基础上做了修订）问世以来，其学术地位、社会反响及读者对它的信赖程度一直雄居日语辞典的首位。在日本，该辞典被视为「国语＋百科的权威辞典」。

『广辞苑』（第五版）具有以下特点：

一、具有权威性，由相关领域著名专家共同编纂；

二、总词条二十三万，其中新增词条一万；

三、释义简明扼要，兼顾词源和词义变迁的信息；

四、配有二千多幅精美的释义插图。

『广辞苑』是一部深受日语学习者和日语读者喜爱的辞书，但某些涉及到中国的词条与我国现行的观点不相吻合，对此我们做了必要的删节或修改。此外，还有一部分物品名称、历史事件名称及地名等与我国的称谓不一致，并较多地出现在释义中，但为了保持该辞书的原貌，本影印本对该类条目基本上未做大的改动，望广大读者以正确的审视的眼光去看待这些内容。

本辞典是日语学习者和翻译工作者理想的案头工具书。

上海外语教育出版社　二〇〇五年三月

自序〔第一版〕

いまさら辞典懐古の自叙でもないが、明治時代の下半期に、国語学言語学を修めた私は、現在もひきつづいて恩沢を被りつつある先進諸家の大辞書を利用し受益したことを忘れぬし、大学に進入したころには、恩師上田万年先生をはじめ、藤岡勝二・上田敏両先進の、辞書編集法およびその沿革についての論文等を読んで、つとに啓発されたのであった。柳村上田からは新英大辞典の偉業の紹介を「帝国文学」の誌上で示され、目をみはって海彼にあこがれた。われらもいかにしてか、理想的な大中小はともかくも、あんなに整った辞典を編んでみたいものだと、たのしい夢を見たのであった。

かくて、英米独仏の大辞書の完備に対して限りなき羨望の情が動き、ひたむき学究的な理想にのみふけりつつ、青春の客気で現実的方面については一層暗愚であったことは、後年とほぼ同様であった。卒業後の三年めの明治三十五年（一九〇二）から凡そ五年間、それぞれの大辞典の編著や統理に成功を収めた上田・大槻・芳賀・松井等の諸先覚には、他方において国語の研究や調査や教育や改善やの諸事業にわたって計るべからざる種々の資益を得たことが、かれこれと想起されてくる。とりわけ、上田・松井両博士の「大日本国語辞典」と、大槻博士の「大言海」とに関しては、身親しくその編集室に見学した縁故もあったのみか、殊に後者の校訂には深く参与し、前者の再刊に際しては僅少ながら接触したゆかりもあって、自分のためにも、何かと参考に資せられて幸福であった。その後も、かれこれ二つばかりの辞典の編集に参画はしたものの、元より綜合統理の任に当った次第ではなかった。それに反して、自分の仕事は、主として語原や語史、語誌や語釈の、主として分解的な、しかし根本的本質的な方面の考究に専念し、綜合的方面の事業に意を致し力を注ぐまでには至らなかった。それは、自分自身の研究が、当初は

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

音韻および文字に、やや進んでからは漸次語法や語義に及び、後年には段々と語誌に向って来たのであって、要は分解を主とし、綜合にうとかった。

今から二十年前、私の辞典の処女作が出来て、望外の歓迎を受けたが、内心大いに満足し得ず、「言海」の著者が、古く率直にその巻末に録しておいたごとく、そんなに良く出来あがったものは無く、ただ直してゆくばかりだ、と思って、すぐさま改訂の業を起し、或は簡約し、或は増訂し、同時に業を進めて、大戦の末期に入り、改訂版の原稿が災厄に帰した。簡約版は衆知のごとく、早く印行して世に出でたが、しかし私に代って戦時中には、統理の傍ら、他方には、新たに、語詞の採訪と採集とに力を尽くしつつ専ら改訂の業に従った私の次男猛は、苦心努力の結果、辞書編集上、望外にもこよなき良い経験と智識とを得たかと信ずる。彼自身もまたフランスの大辞典リットレないしラルース等の名著およびダルメステテール等の中辞典から平素得つつある智識を、他山の石として、乃父の改訂「辞苑」旧版本の礎石の材料にも供してくれた。彼は従前のごとくには、今回の「広辞苑」の編集に関して、協力する余裕は十分でなかったが、名古屋大学の行余の力をこれに注いでくれ、老父の能くせざる所を補足し、編集および印刷の進行、人事その他各般の統理に心を尽くしてくれた。現代の国語に対する智識と感覚とについては、当然長所の在ることは認めてよろしく、その点において、むしろ語史にのみ傾倒せる編者の粗漫な一方面を補佐してくれたことを付言したい。また、グリム兄弟の場合とは、全く違った情味が存する。

以上、主として改訂「辞苑」の進行および始末について述べつつ、その善後の処理に及ばんとしたが、戦後その改訂版の長所を保存し、短所を除去し、内容形態共に新時代の要求に応ずる必要上、根本的修正と増補とを施すことを得たのは、昭和二十三年九月より岩波書店内に設置された編集室において、斯業の経験と智識とを具備する市村宏氏を編集主任となし、終始一貫、増訂の業を進めたことによる。爾来、編集部はこの複雑な編集に従事し、その間いくたびか内員外員の増減変動と場所の転移等とを見たが、書店内外よりの定期臨機に嘱託された諸員諸君

の格別なる協力に依って、編集すでに了り、校正および修治の業、将に完成せんとするに至ったのは、まことに欣懐といたす所である。

抱負と実行、理想と現実、その間、自分の未熟か老境かよりして、事志と違った趣きがあることを自省してやまないが、とにかく、簡明にして平易、広汎にして周到、雅語漢語、古語新語、慣用語と新造語、日用語と専門語、旧外来語と新外来語、新聞語と流行語、みなつとめて博載を期した。発音の正確と語法の説明には意を注ぎて、規範を示さんと欲したけれども、現在の規範こんとんとして未だ定まらぬ不便をなげかねばならなかった。

誇称してもよいが、われら父子が親交ある哲学・史学・文学の先進同友をはじめ、今日の科学界に令名あり世界的栄誉をも博せられた碩学者より、直接にも間接にも指示を受けた語詞の説明も少なからず存し、花さき実のれる、この言語園を展望しながら、感激してやまぬ心境に在るのである。従来の経験により、あとからあとから、自他の注意から、種々補修を要することが、殊に一般辞書の上には生じがちなのを按ずるが、さりとて先進の辞典学者の引いた言葉にたよって、あのラテン語の金言や、ゲーテの箴言にもあるがごとき、過まるは人のつね、容るすは神のみち、とやら申された遁辞めいた文句にすがる気はない。ただ周密な眼光をもって徹底的に過誤なきを期したばかりである。

もしそれ、物の順序からすると、大辞書が先きに出来あがってから、その後に、それらの成果を収拾し抜萃し、簡易に平明に、短縮して編集してこそ、より完全な中小辞典、簡短（ショーター）とか、要略（コンサイス）とかの文字を冠らせた中型小型の辞書が作られるわけであるが、私一個の場合、その逆のコースを進んで来たので、殊に現今わが国語界の標準規律は未だ緒につかず、新語の粗製濫造のはげしい時代には、程よき中辞典の達成は、省みるに早計であったかも知れない。

上記のごとく、本書は、当初の出発点こそ改訂版をいささか加除し修正する程度から進んだのであったが、いつ

しか本来の節度をかなり超えて、根本的修正が、ひとり文字の表記法のみにとどまらず、載録語詞、分量の上のみならず、かなり本質的にも及ぶことになってしまった。結局、実質にも、形式にも、少なからぬ進歩の跡がみとめられると信ずる。従って、頁数や組方の上にも、多大の影響を及ぼし、厚みその他装幀等色々な点にも、予想以上の多難を感ぜねばならなかった。

かくて、編集完成の時期もおくれたし、諸般の煩雑名状しがたい苦難も嘗めなければならなかった。編集部においても、辛うじてこれらの難を克服し得たのであるが、部員の手不足などを補充するために、書店の内部からも、俊敏練達の士の参加協力を得ると共に、臨時に外部からも特に明達懇篤な新進諸学人の援助をも求めることとなり、内外一和、衆力一致、他方もちろん熟練な校正員の補翼にも由り、着々、印刷の工程もなめらかにはかどり、ここに発行の機運に恵まれるに至ったのは、編者の満足これに及ぶものはない。

それら諸彦の助力を跋文中に銘記するに先だって、特に今記すべき一事は、畏友大野晋氏が、語法と基本語詞につき、更にその同窓板坂元・竹内美智子両氏の協力をも得て、応急適切な援助を寄せられたことである。

斯業行程の始終に関しては、一に岩波書店前店主故岩波茂雄氏の宏量と、現社長同雄二郎氏の寛厚に感謝すると共に、事業の進行上絶えず店内の練達者諸賢から、啓発激励を蒙ったことを肝銘する。さかのぼっては、前行「辞苑」の出版改訂時代の、博文館の上局諸氏と、忠実なる編集主任たりし溝江八男太翁と内助の一老友をも想起せざるを得ない。曾て「私の信条」として書いた如く、老至って益々四恩のありがたきを感ずるのみである。

昭和三十年　一九五五年　一月一日

京都　新村出

第五版の序

人はどのような時に辞書を引くのか。ある中国文学者は、「象潟」という秋田県の地名を不審に思った。あれこれの調査のあと、最後には『広辞苑』を引いて大いに納得した。こういう場合、『広辞苑』でけりがついているのは嬉しいことである。他の辞書を引いても同様の答えを得るに相違ない。ではなぜこの人は『広辞苑』という固有名詞を記したのであろうか。その調査のプロセスの文字化にあたっての確かな証拠として『広辞苑』という辞書名を付記したのであろう。この人の場合、不明のことばを探るために辞書を繰ったのであるが、世にはもう一つ、枕に『広辞苑』によるという表現をとっての物言いがしばしば存在する。版を重ね、長い歴史を有する『広辞苑』なればこそと有難く思うが、こういう場合、おそらく書き手の言わんとすることについてのキー・ワードの解釈は既に十分書き手側に存在するのに、わざわざ当該語の意味を『広辞苑』で確認するのは、一種の権威づけの作用を持っているのではなかろうか。こうなると、辞書作りの側としては空おそろしくさえあるが、もともと辞書というものは、いかに力を尽してもなお行き届きかねることがどうしても存在する。最善への志向はあっても、表記法の点などでは戦後いくばくかの規定が法令として告示されてはいるものの、なおその他の分野では、めまぐるしい変化が渦巻いているという現実の中での対応はなかなかに厳しい。まして本書が「ことば」のみならず時代の要請に応じての社会全般の「ことがら」の解説を意図する時の努力は、ますます深められねばならない。この領域はその深さと広さとにおいて拡大する一方である。諸科学のめざましい進展、全世界的レベルでの時々刻々の社会情勢の変化に応じての辞書作成の対応は非常な努力を必要とする。

「ことば」と「ことがら」とをすべて一冊の辞典内におさめるのは、最近の多くの中辞典がとっている方針であるが、辞書利用者はおそらく二つの立場を分けてはいまい。「ことば」も「ことがら」も一流れとして受けとめて

いよう。それほどまでに一体化した感がある。

辞典というものは、ことばという存在の海に乗り出す、まことに頼りがいのある舟のようなものであろう。日々の私たちの暮しに無数にきらめいている、ことば、ことば、ことば。その眩惑の世界に一定の筋道を与え、辞書を使う人にやすらぎと納得とをもたらす存在が辞典であるのではなかろうか。

新村出博士は、辞典を編むにまことにふさわしい方であった。残念なことに第一版の序文のみを遺されて、第二版刊行の二年前にこの世を去られたが、その最初の格調高い序文は何年たっても輝やかしい。先生は博識この上なく、稀に見る「ことば」や「ことがら」に対する深甚の興味をお示しの方であった。ことばの存在そのものに感動を湧かせる方であった。私は少女期から辞書好きであった。小学校六年時(一九三五年)に刊行された、『広辞苑』の前身『辞苑』に夢中になった。語義不明のことばを引くこともしたが、さらに読物としても明け暮れ『辞苑』をめくっていた。あまりめくりすぎてページの隅がまくれ上ってしまった。図解を写し取ったりもした。ほぼ五〇歳年長の先生のお仕事にこどもがかかわったという次第であった。それほどにおもしろい辞書を編まれた新村先生のお力は今思っても絶大である。先生はきわめて綿密にして膨大なデータ蒐集を実に丹念にしておられた。御縁を得て長じての私が先生宅をおたずねすると、御子息の猛氏とともにそういう作業におはげみのことがよくあった。

その『辞苑』がさらに発展して、一九五五年、『広辞苑』初版が刊行される。そこに至るまでの先生、そして多くの人たちの努力は筆舌に尽しがたいものがあった。戦争を経ての困難も多かったが、幸いに百科辞典的色彩を加味した国語中辞典が出来上った。今でこそ同類の辞典も多いが、まっさきの刊行は世人に喜ばれた。

昨今、世人のことばへの態度がかなり変ってきたかに見える。辞書は家庭の単なる備品の一つと言いきる人さえいる。学ぶ人たちも辞書を引いて知るということを自らの日常行為としなくなったという。しかし、それなればこそなお辞書はよき辞書たるべき努力を怠ってはならぬ。辞書を引くことの効用、喜びを、新村先生の思いにも応ず

る心意気で世の人に知ってもらいたいと心から念ずる。

新村先生は常に新しい志をお持ちの方であった。『辞苑』から『広辞苑』へ、そして初版刊行のあと、さらにより『広辞苑』を望まれた。しかも、初版に見られる先生の方針はずっとひきつがれている。先生の実証主義的・歴史主義的立場からして、語義の記述も、文献による歴史的変遷の順を追って排列されている。反対に、現代の意義から順次時を遡るというやり方もある。性急に現在の問いかけに答えるためにはそれもよかろうが、その現在がどこから発しているかを知って今に至るという方法が、より豊かに現在に到達できるのではないか。先生の方針もいたずらに古いとのみ言えない。

辞典とは、編者の手を離れた時、既に補訂を必要とする。先生も一九五五年の初版刊行後、早速第二版への準備をすすめられたが、改訂の話が岩波書店との間にまとまったのは六四年、先生は既に米寿に達しておられた。新村猛氏を中心とする多数の執筆者と書店との全面的協力が得られ、六九年春に第二版の刊行を見た。かえすがえすも痛恨事は、六七年八月一七日先生が御他界になり、どんなにお心にかけておいでであったろう第二版の完成をついに御覧になれなかったことである。先生の没後、「新村出遺著刊行会」が設けられ、以後『広辞苑』の修補は、この会と岩波書店辞典編集部とが協同して担当することになった。やがてその代表者新村猛氏から改訂第三版編集が発議されたが、まずは最小限の補訂として第二版補訂版を七六年に刊行、ついで第三版は八三年、新村猛氏を中心に金岡孝氏らの協力で刊行された。その間、「遺著刊行会」は遺著刊行も終り発展的に解消し、八一年五月に「新村出記念財団」が設立されてその事業を継承しつつ、国語学・言語学の研究を助成する事業などを行なうとともに、財団内の「刊行委員会」が理事会の委託を受けて『広辞苑』の編集・修訂に当たることとなった。

第三版刊行後数年たって第四版の計画が急速に具体化していった。この第四版に至ってはじめて、「財団」が『広辞苑』の編修についての責任を負うという方式が実質的に行なわれ、「刊行委員会」から改版の実施の委嘱を

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

受けた「編集委員会」が山口明穂氏を中心に第四版の刊行をめざして活躍した。岩波書店からも担当者が参加し、多くの苦労を重ねて、九一年第四版の刊行を見た。

新版刊行の実現は段々間をつめてきているが、九四年五月にはもうはや新版への改訂のための第一回編集会が開かれた。時代の要請に応えてのさらなる現代化。国語項目・百科項目とも社会生活上の大きな変動に即応した全面的改訂。国語項目においては山口明穂氏にひきつづき総括責任者として御尽力をたまわった。あつく御礼申し上げる。この第五版刊行が成ったについては、実に多数の方々に一方ならぬお力を頂いてのことであり、さらには岩波書店側の長年の辞典作りの経験を生かしての考案と実行力あってのことであった。

この間、九二年一〇月に新村猛氏が、九四年一〇月には阪倉篤義氏がなくなられたことは悲しみの極みである。『広辞苑』の成立についてはお二方それぞれに並み並みならぬ御恩を蒙っている。猛氏についてはそれこそ『辞苑』の昔から新村出先生の御子息として、八四年一〇月に思わぬ事故でおなくなりになった氏の御子息新村徹氏とともに三代にわたる御尽力のことを思えば切々たる思いがある。阪倉篤義氏は第四版刊行に当たって財団理事長として編集委員会を主宰され、全項目を校閲くださり、さらに序文までお書き頂いていることを思ってとりわけ嘆きが深い。ここにひたすら両氏の御冥福を祈るしだいである。

第四版から第五版へ。初版以来の確実な道程を思う。どんなに多くの方々のお世話になったことだろうか。今ここに心からあつく御礼申し上げる。

一九九八年一〇月

新村出記念財団　理事長
寿岳章子

凡例

編集方針

一、この辞典は、国語辞典であるとともに、学術専門語ならびに百科万般にわたる事項・用語を含む中辞典として編修したものである。ことばの定義を簡明に与えることを主眼としたが、語源・語誌の解説にも留意した。収載項目は約二十三万である。

二、国語項目は、現代語はもとより、古代・中世・近世にわたってわが国の古典にあらわれる古語を広く収集し、その重要なものを網羅した。漢語・外来語のほか、民俗語・方言・隠語・慣用句・俚諺の類についても、その採録に意を用いた。

三、わが国語のうち最も基礎的と思われる語約一千を選んで、その語義・用法などを特に詳述した。

四、国語項目の解説に当っては、つとめて古典から文例を引用し、また、現代語の作例を多く掲げ、語の用法を実地に示した。また、仮名遣いや発音を定めるに当っては、古辞書・訓点本の類に照らして正確を期した。

五、現代一般に用いられる、造語能力を有する漢字約三千二百を項目として掲げ、意味とそれぞれの熟語例を示した。

六、語源・語誌は、編者の説を中心にして諸家の説をも参酌し、要約して注記した。必要に応じて、漢語にはその出典を、外国語の訳語にはその原語を掲示した。

七、百科的事項の収載範囲は、哲学・宗教、歴史・地理、政治・法律・経済、教育、数学・自然科学・医学、産業・技術・交通、美術・芸能・体育・娯楽、語学・文学などの万般にわたり、地名・人名・書名・曲名・年号などの固有名詞にも及ぶ。わが国の人名は物故者に限った。

八、挿図は、服飾・調度・紋様・風俗・動物・植物・建築その他各方面にわたり、地図・模式図を含め二千七百余図を収めた。また、系図・組織図・一覧表など約百表を掲げ、解説文の理解を助けるよう配慮した。

見出し語

仮名遣い　原則として『現代仮名遣い』（一九八六年七月 内閣告示）の方式に従って太字（アンチック体）で表記した。

1　和語・漢語には平仮名を、外来語には片仮名を用いた。

こおり（コホリ）【氷】　**せん・せい**【先生】
ま・ぢか【間近】　**しゅく・じ**【祝辞】
つづ・く【続く】　**クラブ**【club・倶楽部】
こんにち・は【今日は】　**アラスカ**【Alaska】

2　歴史的仮名遣いが現代仮名遣いと相違するものは、その相違する部分を見出し語の下に片仮名で小さく記し、相違しない部分は「・」で略した。

あおい（アフヒ）【葵】　**がっ・こう**（ガクカウ）【学校】
おうさか（アフ：）【逢坂】　**おおさか**（オホ：）【大阪・大坂】
とお・か（トヲ：）【十日】　**もよお・す**（モヨホス）【催す】
いれ・ぢえ（ヱ：）【入れ知恵】　**うわ・ぢょうし**（ウハヂウ：）【上調子】

3　外来語の片仮名表記については『外来語の表記』（一九九一年六月 内閣告示）を参考とした。中国の地名・人名は一般に漢字音によったが、現代地名・人名は、原語音のローマ字表記を解説の冒頭に記した場合がある。

※長音を表すには「ー」を用いた。

※外国の固有名詞、および、外国語の感じが多分に残っている

語に限って〔ヶ〕の音は「ヴ」の仮名で表した。

見出し語の区切り

1　語構成を示すため、語源上からこれを二つの基本部分に分け、「・」でつないだ。語によっては、三つ以上に区分したものもある。

あ・がき【足掻き】　**ふ・かのう**【不可能】
う・の・はな【卯の花】　**しか・のみ・なら・ず**【加之】

語源を確定しがたい場合、また、語形の変化によって区分しがたい場合は、「・」を付さなかった。

やなぎ【柳】(ヤノキ(矢篦木)の転か)
やよい(ヒヨ)【弥生】(イヤオヒの転)
ちょうな(チウ)【手斧】(テヲノがテウノと転じ、さらに訛ったもの)

2　人名は姓氏と名との間で区切り、地名は「山」「川」「橋」などが付く場合、その直前で区切ったが、その他の地名・作品名・年号などの固有名詞は原則として区切らなかった。

3　活用する語は、原則としてその終止形を見出し語とし、語幹と語尾との間に「・」を付した。その位置が語構成を示す「・」と合致する時は、「・」のみを付した。

さが・る【下がる】《自五》　**さ・げる**【下げる】《他下一》
うれ・し【嬉し】《形シク》　**うれし・い**【嬉しい】《形》
かえり・みる(カヘリミル)【顧みる】《他上一》　**め・く**《接尾》

表記形　【　】の中に、見出し語の仮名に相当する漢字または外国語の綴りを示した。

(漢語・和語)

1　相当する漢字がいくつかある場合は、現代標準的と思われるものをもって代表させた。この際、『同音の漢字による書きかえ』(一九五六年七月　国語審議会報告)などを参照した。

※「弘報」(コウホウ)と「広報」(クワウホウ)、「聚落」(シュウラク)と「集落」(シフラク)とのように、字音仮名遣いが異なるものは、別項として扱った。

2　送り仮名は、現代語は現代仮名遣い、古語は歴史的仮名遣いに従って施した。『送り仮名の付け方』(一九八一年一〇月　内閣告示)に示された原則に準拠しつつ、旧来の慣行をも考慮して送った。

あた・る【当たる】　**あ・てる**【当てる】
おも・う(オモフ)【思う】　**おもい**(オモヒ)【思い】
おもい・わた・る(オモヒワタル)【思ひ渡る】
ほとんど【殆ど】　**き・に・いり**【気に入り】

(外来語)

3　外来語については、わが国に直接伝来したと考えられる原語を掲げ、その言語名を注記した。英語の場合は一般にその注記を省略した。また、ギリシア語・ペルシア語・ロシア語などは適宜ローマ字綴りに直した。漢字を当てる慣行の定着している語にはこれを並記した。

ビードロ【vidro(ポルトガル)】　**ガス**【gas(オランダ・リス・イギ・ンダ)】
シャポー【chapeau(フランス)】　**テーマ**【Thema(ドイツ)】
イクラ【ikra(ロシア)】　**デスク**【desk】

中国語および漢字の当たる梵語・朝鮮語などの場合は、【　】内にその漢字を掲げ、適宜、原語音をローマ字で注記した。

マージャン【麻雀】(中国語)
チョンガー【総角】(朝鮮語 ch'onggak の転)

4　外国語の固有名詞には原則として言語名を注記せず、解説の叙述で分るようにした。人名の場合は姓だけでなく名をも示し、また、原語における冠詞の類は多く省略した。

セーヌ【Seine】フランス北部、パリ盆地を流れる川。
ハーグ【Den Haag】オランダ西部の都市。
ペキン【北京】(Beijing; Peking)中華人民共和国の首都。

カント【Immanuel Kant】ドイツの哲学者。

5 原語音からいちじるしく転訛した外来語、または外国語に擬してわが国で作られた語には、その綴りを【　】内に入れず、（　）内に注記した。

シュー・クリーム（chou à la crème シュー・アラ・クレーム）

ハヤシ・ライス（hashed meat and rice）

エキス【越幾斯】（extract エキストラクトの略）

ミシン（sewing machine の略訛）

ナイター（和製語 nighter）

6 片仮名で表記した外来語と平仮名で表記した和語・漢語との複合した語は、その片仮名に相当する部分を「ー」で示し、必要に応じてその複合語に相当する外国語を注記した。

アメリカ・まつ【ー松】

かいきん・シャツ【開襟ー】

エーゲ・かい【ー海】（Aegean Sea）

サリチル・さん【ー酸】（salicylic acid）

7 【　】内の外国語を以下の記述で繰り返す時は、その綴りを省略して「～」で表した。

オーバー【over】…　**ー・コート**【～coat】…　**ー・タイム**【～time】…　**ー・トップ**【～ top】…

スミス【Smith】①（Adam ～）イギリスの経済学者。…②（William Robertson ～）イギリスの聖書研究者・東洋語学者。…

品詞の表示　品詞の別は、巻末付録『日本文法概説』の所説に従い、略語をもって《　》内に示した。（『略語表』参照）

1 名詞および連語には、原則として品詞の表示を省略した。

2 動詞には自動詞・他動詞の別ならびに活用の種類を、文語形容詞には活用の種類を示した。活用の種類に関する詳細は、巻末付録の動詞・助動詞および形容詞の活用表を参照されたい。

※動詞の四段活用・五段活用については、文語としての用法しか認められない語に限って、四段活用とした。

文語形と口語形　活用語は、口語形見出しの下に、文語の用法をも併せて解説した。文語形のみあって、口語形が普通には行われない語については、その限りでない。

1 口語形項目には、解説の冒頭に、対応する文語形を 文 として示した。ただし、文語・口語同形の場合は省いた。

し・いる（シヒル）【強いる】《他上一》文 し・ふ（上二）

2 文語形・口語形の見出しが排列上相並ぶ場合は、文語形見出しを立てなかった。また、口語形サ変動詞についても、その文語形見出しを省略した。

見出し語の排列

五十音順　現代仮名遣いの五十音順により排列した。

1 清音・濁音・半濁音の順に置いた。

し・さい【詩才】　**へん・き**【騙欺】

し・ざい【死罪】　**べん・き**【便器】

じ・さい（ヂ）【持斎】　**べん・ぎ**【便宜】

じ・ざい【自在】　**ペンキ**【番瀝青】

2 促音（そくおん）・拗音（ようおん）は、直音の前に置いた。

さっ・き【撮記】　**ひょう**（ヘウ）【瓢】

さ・つき【五月】　**ひ・よう**【日傭】

ざっ・き【雑器】　**びょう**（べウ）【可う】

ざ・つき【座付】　**び・よう**【美容】

3 長音符「ー」は、すぐ上の片仮名の母音（ア・イ・ウ・エ・オのいずれか）を繰り返すものと見なして、その位置に排列した。

コーヒーはコオヒイ、**セーター**はセエタア、**ウール**はウウルの位置に置く。

同音の語の排列　見出し語の仮名表記が全く同じである場合は、順次つぎの基準に従って排列した。

1　品詞の順――名詞、代名詞、動詞、形容詞、連体詞、枕詞、副詞、助動詞、助詞、接続詞、接頭語、接尾語、感動詞の順に排列した。

連語は、体言相当のものは体言の、用言相当のものは用言の後に置いた。

そ・う【疎雨】
そ・うフツ【沿う】㊀《自五》…　㊁《他下二》
そうサウ【然う】（サ（然）の転）㊀《副》…　㊁《感》
そうサウ【候】《助動》
そうサウ《接尾》

2　和語・漢語・外来語の順――品詞を同じくする場合は、一般に和語を前に、字音語を後に置いた。外来語は、その原語の品詞にかかわりなく、名詞の末尾に排列した。

同音の語は、【　】内の首字の字画数の順に並べた。

こいコヒ【恋】
こいヒコ【鯉】
こ・い【古意】
こ・い【故意】

め・す【雌・牝】
メス【mes オダ】
め・す【召す】《他五》

3　普通名詞・固有名詞の順――地名・人名・作品名・年号など固有の名称は、原則として同音同字の他の名詞と項目を併せず、別に見出しを立ててその次に並べた。これら二つの項目が排列順位の上で離れる場合には、普通名詞の項目の解説末尾に（地名別項）（書名別項）などと注記した。

親項目と追込項目　複合語は、語構成上の最初の部分が見出し語として掲げてある場合には、それを親項目としてその下にまとめ、追込項目とした。ただし、一語意識のつよい語は独立項目とした。

1　追込項目の見出し表記は、その親項目に相当する部分を繰り返さず、「**―**」で示した。

2　親項目は、見出し語の仮名が三字以上（促音・拗音などを表す仮名も字数に算入）から成る語に限った。ただし、漢字一字の字音語は親項目としない。

やっこ【奴】…　**―・あたま**【奴頭】…　**―・ことば**【奴詞】…　**―・だこ**【奴凧】…　**―・どうふ**【奴豆腐】…
しょ・き【暑気】…　**―・あたり**【暑気中り】…　**―・ばらい**ヒバラ【暑気払い】…

※「有為うい」に「有為転変」を、また、「食くしょ」に「食あたり」「食中毒」などを追い込まない。

※わが国の姓氏の項目に限り、二字以下の場合も親項目とした。ただし、この場合は人名以外の普通名詞は追い込まない。（次項参照）

3　固有名詞を冠した複合語は、それが普通名詞であっても、その固有名詞を親項目として追い込んだ。人名の場合は、姓氏を親項目としてまとめた。

おうみオフミ【近江】…旧国名。…　**―・あきんど**【近江商人】…
―・おんなヨナミ【近江女】…　**―・じんぐう**【近江神宮】…
―・せいじん【近江聖人】…　**―・りょう**リヤウ【近江令】…
ごとう【後藤】姓氏の一。…　**―・しざん**【後藤芝山】…
―・てん【後藤点】…　**―・ぼり**【後藤彫】…　**―・またべえ**エベ【後藤又兵衛】…　**―・ゆうじょう**イウ【後藤祐乗】…

※見出し語の仮名がわが国の姓氏を除く二字以下の固有名詞、例えば地名の「滋賀しが」には、「滋賀浦しがのうら」「滋賀山しがやま」などは追い込まない。

慣用句　その最初の一単語を見出しとする項目の次に、行を改めて太字（ゴシック体）で掲げた。

1　見出しは、漢字・仮名まじり、現代仮名遣いで表記し、その五十音順に並べた。

2　最初の一単語は「**ー**」で示した。ただし、その部分が活用語の場合、または特定の漢字表記を示す場合は「**ー**」を用いなかった。

解　説

本文の表記

1　説明の本文は現代仮名遣いに従って表記した。動植物名・外来語、また、発音や語形を示す場合は、適宜に片仮名を用いた。

2　漢字の字体は、常用漢字ならびに人名用漢字はいわゆる新字体を、他は広く通用している字体を採用した。

語釈の区分　語義がいくつかに分れる場合には、原則として語源に近いものから列記した。

1　区分を明らかにするため、①②③…の番号を付した。さらに大きく分類する場合は❶❷❸…の番号を、細かく区分する場合は㋐㋑㋒…の符号を用いた。

2　一つの項目を二つ以上の品詞あるいは活用の種類に分けて解説する時は、それぞれの品詞・活用表示の前に㊀㊁㊂…の番号を付した。

3　説明文中でこれらの語義区分を参照する場合は、①②③…は1 2 3…とし、他については小字で示した。

術語の分類　専門学術用語には、その分野を明らかにするため、必要に応じて、解説の冒頭に〔　〕でかこんでその語の分類略語を標示した。（『略語表』参照）

ぜん-い【善意】①善良な心。②他人のためを思う心。…③〔法〕ある事実を知らないこと。↕悪意

漢語の出典　漢語または諺（ことわざ）の類には、必要と認めた場合、漢籍の出典を［　］でかこんで解説の冒頭に掲げた。原典名の下に小字で篇・章名を付した。

ふ-わく【不惑】…②〔論語為政「四十而不レ惑」〕年齢四〇歳をいう。

字音の注記　見出し項目に掲げた一字の漢字について、その字音が一般に二種以上用いられているものには、（呉音）などと字音の種類を注記した。漢音の場合は原則としてこれを省略した。

漢字の使い分け　【　】内に二つ以上の漢字表記があって、語義によって使い方が異なる場合は、語義区分の直後に《》で囲んで、該当する漢字を掲げた。また、項目末尾に◇を付して、現代よく使う漢字の使い分けを説明した場合がある。

季　語　基本的な季語約三千五百を選び、解説末尾に〈季春〉のように、新年・春・夏・秋・冬の季節を示した。

用　例　語義の理解を助けるため、つとめて用例を掲げた。

1　古典からの引用に当っては、原典の仮名を漢字に、または漢字を仮名に改め、漢文を読み下しにするなど、かならずしも原文のままではない。

ただ-びと【徒人・直人】①…推古紀「其れ**ー**に非じ」。…

なみ-する【無みする・蔑する】〔他サ変〕㊇なみ・す（サ変）…古文孝経延慶点「法を無スル（ナミ）」。…

2　用例中、語句の一部を省略した場合は、「…」で示した。また、難解の語句には、（　）でかこんで注釈を施した。

ついえ（ツヒエ）【費え・弊え・潰え】…②つかれ苦しむこと。弱ること。太平記三七「あはれ**ー**に乗る（弱点につけこむ）処やと思ひければ」…

3　引用古典の書名は多く略称を用い、巻名・章段名などは小字で付

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com